

研究ノート

日系作家ヒサエ・ヤマモトの短編に描かれた他者としての記憶
—収容後のアメリカ社会におけるアジアの「同胞」との関係を中心に

Dilemma regarding the relationship with “others” in the short stories of
Hisaye Yamamoto – following the Japanese Internment

飯田 深雪

IIDA Miyuki

1. はじめに

本稿は、「アジア系アメリカ文学」の中でも、「日系アメリカ文学」の作家として知られるヒサエ・ヤマモト (Hisaye Yamamoto, 1921-2011) の短編とインタビューを扱い、当時のアメリカ社会における他のアジア系である中国系などの非白人と共存する社会の他者との関わりと、日系アメリカ人の第二次世界大戦中の収容所の経験と記憶が、その後のアイデンティティにどのように影響しているか、という点に焦点を置き論じ、そこに生まれる主人公の精神的な葛藤について考察する。さらに、ヤマモトが、扱う「他者との共存」という主題について、多文化社会アメリカの例から日本の社会が得られる示唆を探っていきたい。

アジア系アメリカ人のアメリカへの移民は 19 世紀半ばに、アジアから最初の移民集団として中国人の団が太平洋を渡って以来、日本、朝鮮、フィリピンなどから次々とアメリカ社会への参入を果たしたが、アジア系は一様に差別や偏見と闘うことを余儀なくされた。日系の移民が法的に許可されたのは、すでにアジアからの移民としてサンフランシスコにわたっていた中国系より 40 年ほど遅い 1880 年代である。アジア系に対しては、既に中国人が 1882 年の中国人排斥法 (Chinese Exclusion Act) (Daniels, 1991, 256) (飯野, 17) により排斥されていた。その後日系一世たちが大挙してサンフランシスコに渡ったとき、アメリカ西部には、白人支配者階級とアジア出身者の安い労働力との間の確固とした人種ヒエラルキーが既に確立されていた。(東, 48) また、文化の違いから偏見を持たれることもあった。例えば、初期の日本人移民のほとんどは男性だったため、女性が集団的にアメリカに渡った、いわゆる写真花嫁 (picture bride) という習慣について、渡米した女性の中には、写真とは違う年齢の夫に戸惑うケースもあったが、当時の日本の慣習であった見合いと基本的にはそれほど変わらず、日本人にはそれほど違和感のあるものではなかった。しかし、白人社会では、「野蛮で非文明的で反道徳的慣習」だと、異文化の習慣に対する偏見が日本人への嫌悪となり、排日運動の一環として揶揄された。やがて、日本人も 1924 年の移民法 (Japanese Exclusion Act)¹ により、入国を禁止されるに至る。(Daniels, 1991) (Ichioka, 164-170) (ナイワート, 84-85)

当時、アジア系はすべて、“aliens ineligible for citizenship” (Daniels, 1992, 256-7) として、アメリカ国民になることを法で阻まれていた。1790 年の帰化法で、帰化は「自由な白人」のみに許されると明記されているが、そもそもこれは、アフリカ系アメリカ人とアメリカ先住民が市民権を得られないようにするためのものであった。その後、アメリカに移民した東洋人にも同じように適応された。(ナイワート, 16) さら

に、1913 年外国人土地法 (Alien Land Law)² を受け、外国人は土地所有及び 3 年以上の土地の賃借を禁止されていたので、日系人は、白人の土地を数年借りて、農地から農地へと転々とする生活を繰り返していた。そして、1941 年 12 月の日本軍の真珠湾攻撃の後、1942 年 2 月 19 日、ローズベルト (Franklin. D. Roosevelt) 大統領が発令した Executive Order 9066 (西海岸に居住する日本人を祖先に持つ者は収容所に送る命令)³ により、日系人の強制立ち退きが始まった。(竹沢, 40) 歴史学者のジョン・ダワー (John Dower) は、『容赦なき戦争』(*War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*) の中で、

アジアの敵とヨーロッパの敵との区別が、戦争の成り行きというより根強い人種偏見から出ていたことは、1942 年の始めの何か月間で明らかだった。そのときアメリカ政府は日系人を監禁したが、ドイツ系やイタリア系の住民に対してそうした措置は取られなかった。日系アメリカ人は実際、ドイツ系やイタリア系の市民より深く疑われ、過酷な扱いを受けた。ローズベルト大統領は、約 12 万人の日系人をカリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州から立ち退かせ、アメリカ内陸部の 10 の収容所に入れた。(156-158)

と、当時、人種主義に基づく、日系人への強い偏見があったことを報告している。さらに「ロサンゼルスタイムズ」紙は、「日本人の両親から生まれたものは、成長して日本人になるのであって、アメリカ人にはならない。」(ダワー, 156-158) という記事を載せている。

ここで作品を扱うヤマモトは、日系二世で、ロスアンジェルス郊外のレドンド・ビーチ (Redondo Beach) に生まれ、2011 年に 89 歳で亡くなるまで多くの短編を出版している。熊本県出身の両親は、南カリフォルニアでトマトやイチゴの栽培に従事していたが、第二次大戦が勃発した後 1942 年に、他の日系人の家族とともに、アリゾナ州ポストン (Poston) の収容所に収容された。そこで、ヤマモトは、収容所の機関紙である『ポストン・クロニクル』(*The Poston Chronicle*) に記事を書き始めたことをきっかけに執筆を始める。戦後は、アフリカ系のための週刊誌、『ロスアンジェルス・トリビューン』(*The Los Angeles Tribune*) でコラムニストなどとして働き、その後、ヤマモトの作品中最も多くの名作品集に載せられた短編、「十七文字」 (“Seventeen Syllables,” 1949) を雑誌、『パーティサン・レビュー』(*Partisan Review*) から発表している。1986 年には American Book Award for Lifetime Achievement を受賞している。

多くの日系の作家が収容所の経験を中心とした作品を発表する中で、ヤマモトは他のエスニシティを背景に持つ人々と共存する社会を題材にして、日系社会の外にも目を向けている。例えば、「十七文字」では、物語の語り手である農場の二世のロージー (Rosie) が、両親に隠れて、メキシコ系の季節労働者の少年ヘイサス (Jesus) と親しく付き合い、一世の両親に対して後ろめたい気持ちを抱いている。1952 年のベスト・アメリカン・ショート・ストーリーズ (*Best American Short Stories*) に載った「ヨネコの地震」 (“Yoneko’s Earthquake,” 1951) では、主人公のヨネコ (Yoneko) はフィリピン系の農場労働者のマーポ (Marpo) の宗教であるキリスト教や音楽など、すべてに憧れているが、父親は、マーポを侮辱する態度をとる。しかし、ヨネコの母親は、マーポと恋に落ちたことも示唆されている。当時、日系社会には、フィリピン系に対して偏見があり、フィリピン系との異人種間結婚を避ける運動などがあった。(稲木, 162)

(東, 332-333)さらに、「茶色い家」(“Brown House,” 1951)では、中国人が経営する、ギャンブル・ハウスである「茶色い家」に通う日系の父親とその家族が、社会の周縁に置かれた移民やアフリカ系アメリカ人など他のエスニック・グループと出会う。夫がギャンブルをする間子供と車で待つ妻は、警察が来て皆が茶色い家から逃げ出した時、黒人の青年を車に乗せて助けるが、夫は、「くろんぼ」と彼を蔑視し、黒人青年を助けた妻を叩く。

このように、ヤマモトは、アメリカの主流社会対日系人の問題だけでなく、人種的マイノリティ同士の関係にも着目している。本稿で取り上げる作品もその一つで、日系と中国系という、アジア系マイノリティ同士を扱っている。

2. “Wilshire Bus” (1950)

2.1. アジア系の同胞

ここで取り上げる短編、「ウィルシャー・バス」(“Wilshire Bus”, 1950) で、ヤマモトは、日系人以外の非白人との関係に焦点を当てながら、人種偏見と強制収容、さらに、それらによって引き起こされた劣等感に伴う怒りや悲しみに悩む二世の主人公の姿を描いている。若い日系アメリカ人の主人公のエステルは、第二次大戦後のロスアンジェルスの中で、「重大な罪の意識」と「涙が止まらないほどの不快感」に襲われる出来事を経験する。“Esther committed a grave sin of omission which caused her later to burst into tears and which caused her acute discomfort for a long time...” (34) 彼女は、自分と同じ日系の夫のロー(Rou)が第二次大戦で負傷しているので、この黄色いバスに乗って復員兵士のためのホームに行くところである。そして、おそらく中国人であろう身なりの良いオリエンタルの老夫婦に出くわす。“[H]e was probably Chinese, and she noted that he had to repeat his question several times before the driver could answer it.” (35) 行先についてバスの運転手に、自信のない英語で聞いている夫の英語から、その夫婦は中国人らしいのだが、彼の英語は運転手によく聞き取ってもらえず、妻は横で心配している。身なりはきちんとしているが地味な暗い色の服を着たこの夫婦は、菊の花を持っているところから、戦争で負傷した息子の見舞いだと考えられる。夫の英語が通じるかどうか心配している妻に対してエステルは、同じオリエンタルとして親近感を持ち、微笑みながら見つめる。この夫婦と同じ東アジアのエスニシティを背景に持つエステルの視線には「同胞」という気持ちもあるようだ。

この後、酔って一人で周囲に向かって大声で話していた白人の男性が、夫婦にからんでくる。夫婦に向かって、“[W]hy don’t you go back to China, where you can be coolies working in your bare foot out in the rice fields?” (36) 中国に帰れ、苦力⁴のように田んぼで働いたらいいんだ、と言い、得意げに中国人の洗濯屋の英語のアクセントをまねて、バスの乗客の同意を求める。⁵“Esther, pretending to look out the window, felt the tenseness in the body of the woman beside her.” (36) ところがエステルは、隣に座った夫人が緊張で体をこわばらせているのを感じながらも、窓の外を眺めて知らぬふりをする。この男性の、自分の考えを自信満々に一方的に押し付ける傲慢な態度を不快に感じ、老夫婦を気の毒には思っているが、心からの同情は感じていない。

Esther herself, while believing herself properly annoyed with the speaker and sorry for the old couple, felt quite detached. She found herself wondering whether the man meant her in his exclusion order or whether she was identifiably Japanese...she decided, because she was Japanese, not Chinese, and therefore in the present case immune...Then she was startled to realize that what she was actually doing was gloating over the fact that the drunken man had specified the Chinese as the unwanted. (36)

と、エステルは、むしろこの酔った男性からのこの中国人への、「アメリカからの退去要求」に、アジア系である自分も入っているのかどうかと心配するのだが、自分は、「見ただけで中国人ではなく日本人だとわかるから大丈夫」だと判断して、この中国人夫婦に降りかかった災いを他人事として見ている。だがその後、その酔った男性が、同じアジア系マイノリティという境遇にある中国系を批判しているのを見て、自分は日系だから違うと、「ほくそ笑んで」さえいたことに気づく。日系人は、戦後、社会での目覚ましい活躍と、急速な白人社会への「同化」と「従順」な態度などから、アジア系の中の「モデル・マイノリティ」などと言われた。収容所から帰った後、多くの日系人は、日本語を使う、着物を着るなどの日本文化に関わることを務めて行わず、「白人社会と同化する」ことに特に注意を払っていたのである。(Daniels, 1991, 257)

2.2. 敵性外国人としての収容所生活後：アメリカ社会の「他者」として

エステルが自分の行動や中国人の夫婦への自身の無関心に後ろめたさを感じたとき、ある記憶が戻ってくる。戦後、収容所からロスアンゼルスに戻ったばかりの頃、電車を待っているアジア系の老人に、「同胞」として微笑みかけたが、老人は“I AM KOREAN” (36) というバッジをつけていてエステルはショックを受けたことがあったのだ。その時、エステルは裏切られたような気がしてのどが熱くなるような怒りを覚え、自分もその朝鮮人⁶ に対して、“I AM JAPANESE” (36) というバッジをつけて見せたいと思った。戦争中、日系人が敵性外国人として収容所に入れられると、中国系や朝鮮系の人々は、日系人だと思われぬようにこのようなバッジをつけて外を歩いていた。

中国系、朝鮮系にとっては、真珠湾の攻撃で戦争を始めた日系のおかげで、自分たち、他の東アジア系も、日系人と間違われて差別を受けることになったと恨んでいたのかもしれないとエステルは考える。アジア系アメリカ移民を中心とした歴史研究家の Roger Daniels も、“There would have been special stress for people with a Japanese face—The face of the enemy.”(1993, 27) と、敵である「日本人の顔」をしていることは大変なストレスであったであろうと指摘している。

エステルは、その後、自分の心の狭さを恥じ、そのバスの中の中国人の女性に笑顔を送るが、エステルの期待を裏切り、よそよそしく無表情の中に、その女性はエステルに対して「敵意」を見せたのである。酔った男性は、さらに、“Your slant-eyed pickanies with you!” (37) と、細い釣り目の子供たちもみんな連れて帰れ！と言ってバスを降りた。すると、バスの中のもう一人の白人男性が同情して中国人に話しかける。エステルは、その人は一目でアジア系だとわかる自分にも話しているのだと感じながら聞

いているのだが、彼は、酔っ払って差別的な発言をした白人と自分は違う、“We believe in an America that is a melting pot of all sorts of people. I’m originally Scots and French myself.”(37) アメリカは人種のるつぼで、自分もスコットランド人とフランス人の血が混ざっていると、と中国人の夫に友好的に握手を求めるが、彼は、アメリカ社会の周縁で明らかに見た目の違うアジア系移民であることと、スコットランド系やフランス系などの白人移民であることは、まったく意味が違うことに気づいていない。彼の慰めの言葉はバスの中のアジア系には空虚にしか聞こえない。日本と同様に敵国であったドイツ人やイタリア人は日系人と同じ処遇を受けることはなかったし、日系一世たちは、市民権すら与えられていなかったのだ。(Daniels, 1993, 26)

ヤマモトは、アメリカの白人と非白人の関係について、トシオ・モリ(Toshio Mori)の短編集の前書きに以下のように書いている。

私たちみんなが矢面に立ってきた人種偏見とはいかなるものだろうか?。。。白人はその偏見の中心からは離れていて、私たちの日常生活を侵害してくる場合のみ、付け足し程度に言及されるだけである。しかし、白人がいつも私たちのコミュニティの外側において、ゲームのルールを決めているということに私たちは気づかされた。。。 (日系人は) 日系コミュニティという非難場所の中でこそ、人間の尊厳が保てたのである。(Yamamoto, 1981, 202)

エドワード・サイード(Edward Said)は、『オリエンタリズム』(*Orientalism*)のなかで、ヨーロッパ的あるいは西洋的なものの優越性、及びそれ以外のものの劣等性を明らかにするヨーロッパ中心主義的普遍主義を「オリエンタリズム」と呼んでいる。「オリエンタリズム」は、自分たちがいる西洋に対して、アジアを、劣等なものとして、彼方にいる「他者」とみなす。この、文化的・人種的偏見を含んだ植民地主義が、この時代のアメリカの社会にも存在し、サイードが批判する自民族中心主義的あるいは、ヨーロッパ中心主義的な視点を採用してしまっていると考えられる。

2.3. アメリカ社会のルールを決める他者と同胞である他者

エステルは、自分の心を慰める気持ちが失せて、“infuriatingly helpless” (37) というように、腹が立つほどの無力感と、“insidiously sickening sensation” (37) 嘔吐させるような得体の知れない感覚がこの世界にある、と感じる。そして戦争中の記憶が戻ると、戦争が終わってもカリフォルニアの社会から消えないアジア系への偏見を再認識して落胆している。この「嘔吐感」は、自分の中にもあることがわかった差別意識を吐き出したいという罪悪感や、自身も経験しているどうにもならない人種偏見という社会の壁に対する焦燥感である。「無力感」は、このアメリカの社会にいる限り、人種的マイノリティとして他者化されていることに気づいたからである。

2組のアジア系が、アメリカのために戦争に行き負傷した家族に花を持って見舞いに行くこのバスの中には、戦争や差別というアメリカでのアジア系の記憶が渦巻いている。この不利は、真珠湾攻撃や第二次大戦前からずっと、中国系や日系など人種的マイノリティに向けられていたのである。多くの日

系人は収容されているにもかかわらず、収容所から自分たちの夫や息子を危険な戦争に投げ出したが、いまだに「アメリカ人」として認めてもらえない。戦争負傷者の家族を見舞うこの中国人夫婦も同じで、「中国に帰れ」などと言われてしまうのだ。まして二世は、アメリカ生まれのアメリカ人であるのに、その国ですら認めもらうことができない。アジア系であることは、ヨーロッパ系であることとは違うのだ。エステルは、ここで再びこの不利に直面して、心の奥に内在していた記憶が戻り、この世に確かなものは何もないと落胆する。

エステルの夫ブローは、病室に入ってくるなり泣き出すエステルを見て、今までそんな弱さを見せたことがなかったのに、“What’s the matter? You’ve been missing me a whole lot, huh?” (38) と聞くが、エステルは、夫に、“[Y]es, isn’t woman silly?” (38) と答えて笑って、今起こったことを夫に話さない。エステルの焦燥感の大きさ、夫が戦後もずっと入院するほどの負傷を負っていることなどに対する心理的な不安や夫への配慮から事実を口に出せないと考えられるが、エステルが、「女性」であることを理由にしていることから、アメリカ社会には、人種間の問題だけでなく、夫婦の間に存在する理解し合えない問題があることも暗示されている。この事から、ヤマモトの作品にうかびあがる「他者との関係」という問題意識が、多様で普遍的であることが窺われる。

3. 戦後の日系二世: 社会への同化

3.1. 日系二世のアンビヴァレントなアイデンティティ

さて、ヤマモトの家族が経験した収容所の経験とはどういうものだったのであろうか。アメリカ政府による第二次大戦中の多くの日系人の収容は、アメリカでの日系人の人権を無視しただけでなく、彼/彼女らの家や持ち物を全部放棄させるなど、心理的に大きな苦痛を与えた。ヤマモトの収容所での生活は3年間であったが、その時期に、弟は、コロラドでサトウキビ畑での労働を課せられた後、日系部隊442部隊に志願して19歳で亡くなっている。442部隊は、彼らの母国であるアメリカへの忠誠を証明するために、収容所で二世たちから編成されていた。(飯野, 118-9) 二世の若者たちは、部隊に入隊することで、今まで抱いたこともない「天皇への忠誠」を否認するよう求められ、拒絶したものは刑務所に入れられた。(飯野, 115) この442部隊の戦果は、その後、日系人のアメリカ社会での立場を有利なものにして、ここから、日系人が「モデル・マイノリティ」と考えられるようになった。(Ichioka, 176)

ほとんどの日系人は、戦前、西海岸に居住しており、お互いに助け合いながら絆の深い日系のエスニック・コミュニティを作っていた。中には、日本人学校、日系人のキリスト教会やスポーツ・チームなどの活動などがあったが、その後コミュニティ全体が収容され劣悪な環境の収容所内で辛い経験をした。(ナイワート, 203) また、戦前によく築き上げた財産や社会的地位や仕事を失った精神的打撃は大きかった。特に二世はアメリカで生まれ、アメリカ市民として生きてきたので、アメリカに裏切られたと感じた。(飯野, 153) ヤマモトは、キン・コック・チュン(King-Kok Chung)からのインタビューで、

Southern California has always been a melting pot, at least in my experience. I gradually became aware of discrimination and when we Japanese were singled out for mass detention during the war, that really opened my eyes to what prejudice can lead to. (Chung, 78)

と、収容所に送られてから徐々に南カリフォルニア社会の日系人への「偏見」に気づいた時のことを回顧している。また、戦後かなりの時期を経ても強制立ち退きの経験を子供に話そうとしなかった一世、二世や、日本語を学ばない二世が多かったことは、一世と二世のコミュニケーションが絶たれてしまうこと、すなわち、歴史や文化が伝承できないことを意味している。二世の多くは、アメリカ人でありながら日本人を祖先とするために自らの出自に罪や恥の意識を持つようになり、日本に関わるものをすべて排除してアメリカ社会に同化しようと努め、「日系としてのアイデンティティ」を否定するようになった。日本との関係をできるだけ抑圧し、排除することが、アメリカ社会で生きていく上で必要だと考えたのである。(飯野, P.141-2)

3.2. 収容所の記憶と日系のアイデンティティ

カルチャル・スタディーズが専門のマリタ・スターケン (Marita Sturken) は、人の記憶は、その人のその後のアイデンティティの核心になるとして、以下のように述べている。

人間の生は記憶によって織りなされている。記憶は、日々のありふれた仕事をこなす能力から、自分が自分として承認されることに至るまで、およそありとあらゆる営みに作用を及ぼしているのである。たとえば、記憶は、「生が連続している」という感覚をしっかりとものにしてくれる。どんな瞬間もそれに先立つ過去があって初めて作られているのだから、記憶は現在という時間に意味を与えている。その場合に記憶は、我々が自分はだれであるのかを思い出すための手立てとして働いており、アイデンティティの核心そのものを提供しているのである。(16)

アメリカの白人社会に真珠湾攻撃の打撃がまだ大きな「記憶」として残っているように、日系人には収容所の「記憶」、そのあと帰ってきてからの差別などの苦労の「記憶」が残った。(ローゼンバーグ、105) それで、現在の彼/彼女らのアイデンティティづくりに影響している。収容所でヤマモトと一緒に『ポストン・クロニクル』(*The Poston Chronicle*)誌で働いた劇作家のワカコ・ヤマウチ (Wakako Yamauchi) は、収容所の経験についてのインタビューで、“The worst is the colonization of the mind. You think you are less than what other people are because you are there (camp).” (Cheung, 356) と、(収容所にいることで)最悪なのは、自分の精神が「植民」されるように服従してしまうこと、自分はほかの人々よりも劣等な人間であると考えてしまうことだと述べている。日本との深い繋がりが無い二世たちは、アメリカ生まれのアメリカ人でありながら、アメリカの敵国とみなされていた日本を表象する姿かたちをしていることで、社会から他者扱いされた。それゆえ、彼/彼女らにとってアメリカ社会での日系のアイデンティティの修復と獲得の過程は複雑で混乱するものであっただろう。

エステルは、アメリカ社会に同化しようとするうちにアジア系に対する社会の人種偏見という不利に気づかなくなり、バスの中の同じアジア系の中国人夫婦が侮辱されるところを見ても疑問に感じず、知らぬふりをして、他人事として見ていた。だが、この出来事がきっかけで、アメリカ社会にまだ存在するアジア系への偏見を、収容所の記憶を通して再認識し、自身のアジア系としてのアイデンティティに気づいた。エステルの名前のもととなる、旧約聖書のエステル記の主人公である“Esther”は、ユダヤ人であることを隠してペルシャの王妃となるが、のちにユダヤの民族が絶滅の危機にさらされた時、自分の出自を明かしてユダヤ民族を助ける王妃の名である。(Achtemeier, 280-281) ヤマモトは、エステルに、二世に対する抑圧への抵抗を促し、自身のエスニック・アイデンティティの再生のために立ち上がる勇気を託していると解釈できる。

4. おわりに

差別や偏見は、白人社会だけでなく、人種的マイノリティ同士にも、場所や人を選ばず誰にでも起こり得る普遍的な問題であり、社会の中で様々なグループが、文化的差異などを理由に他のグループを他者化したり、周縁化したりする可能性を持っている。ヤマモトは作品を通して我々に、エステルが無意識に感じていたように「私はほかの民族とは違います。(他の民族より)優越民族です。」と感ずることがないだろうかと問い、さらに、「自分は他の民族より優越だ」という考えから民族間や文化間の亀裂が育ってしまうのだと警鐘を鳴らしている。社会の偏見のために収容所という不利を味わった日系人であるからこそ、社会における偏見を取り去らなければならない、さらに、差別や偏見のある社会で他者化された自身の中にも、他の民族を他者化している自分がいることに気づく必要があるというヤマモトの思いが込められている。

Stella Ting-Toomey は、「異文化コミュニケーション」の視点から、民族間など、異なるグループ間の偏見や葛藤について、

偏見は、グループ間の葛藤において最も起こりやすく、歴史の中で過去に起こった葛藤のしこりを持ち続けていると、現在もお互いに脅威を感じ、偏見を持つてしまう。また、相手グループに対する認識不足や誤解などがあると、相手をあまり知らないにもかかわらず、相手についての情報を過度にステレオタイプ化するようになり、ますます相手を脅威に感じる。しかし、お互いが個人対個人のポジティブな関係を作れば、「人間同士の顔」が見えてくる。ネガティブな考えをもって、相手グループの表面だけを見ていると、相手に対するステレオタイプや偏見を正しいと思いこんでしまう。(Toomey, 111-112) (筆者訳)

と、他者を理解するためのヒントを挙げている。日本も多くの移民や外国人居住者を受け入れ、「他者」を受け入れるインクルーシブな社会にするべく、今後の多文化社会の在り方を模索している。文化や人種の違う人たちとの関係において、人種や文化を超えた「人間同士」として理解しようとするのが今後の課題であろう。

本稿では、日系アメリカ文学を題材に、移民社会における同胞との共生と、差別などの記憶のアイデンティティへの影響などについて考えたが、今後は、アフリカ系との関係を扱った作品などの研究も進め、アメリカにおける日系コミュニティと他のエスニック・グループとの関係について、異文化理解の視点から問題点を分析し、より深い考察を行っていきたいと考える。

【註】

- 1 排日移民法は、各国籍の移民をそれぞれ2パーセントと設定する一方、市民権を得る資格のない外国人の移民を禁止するという法案で、日本人を完全に排斥することが合理化された。
- 2 California Alien Land Law は、米カリフォルニア州議会で1913年に可決された市民権獲得資格の無い外国人(主に日系人らアジア系移民)の土地所有および3年以上の賃借を禁止した。ヤマモトも南カリフォルニアで少なくとも9回の引っ越しをしたとインタビューで述べている。
- 3 1941年12月の真珠湾攻撃により、日本とアメリカが交戦状態となったため、諜報活動の阻止や軍事活動への妨害阻止を名目として、1942年2月19日に大統領令9066号が発令され、その後、6か月で10万人の日系人が収容所に送られた。
- 4 苦力(クーリー)は、19世紀から20世紀初頭にかけての、中国人・インド人を中心とするアジア系の移民、もしくは出稼ぎの労働者である。アメリカでは、大陸横断鉄道建設の労働者などとして、中国からカリフォルニアに10万人以上が送られた。
- 5 1882年の中国人排斥法下で、チャイナタウンは、洗濯業などによって生き延びる道を見出すことが多かったため、中国系(および日系)は洗濯業というステレオタイプができていた。
- 6 この当時は、1948年の韓国の独立前で、朝鮮と呼んでいた。

【引用・参考文献】

- Achtemeier, Paul. J. ed. *Harper's Bible Dictionary*. San Francisco, CA: Harper & Row, 1985.
- 東栄一郎(著) 飯野正子(監訳)『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで: 忘れられた記憶 1868 - 1945』、明石書店: 東京、2014.
- California Cultures: Asian Americans, CALISPHERE, University of California Libraries.
<https://calisphere.org/exhibitions/54/asian-americans-world-war-ii/> 2017.12.18
- Chang, Jefferey P., Chin, Frank., Inada, Lawson F., & Wong, Shown. ed, "And the Soul Shall Dance." in *The Big Aiiieeeee!-An Anthology of Chinese American and Japanese American Literature*. New York: A Meridian Book, 1991.
- Cheung, King-Kok. *Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Joy Kogawa*. New York: Cornell University Press, 1993.
- Cheung, King-Kok. "Interview with Hisaye Yamamoto" in *Seventeen Syllables*: New Jersey: Rutgers University Press, 1994.
- Cheung, King-Kok. ed. *Words Matters: Conversations with Asian American Writers*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2000.
- Daniels, Roger. *Coming to America: A History of Immigration and Ethnicity in American Life*. New York: Harper Collins, 1991.

- Daniels, Roger. *Prisoners without Trial: Japanese Americans in World War II*. Hill and Wang, New York: A division of Farrar, Straus and Giroux, 1993.
- ダワー、ジョン、W.(著) 斎藤元一(訳)『容赦なき戦争—太平洋戦争における人種差別』東京:平凡社、2007.
- Hosokawa, Bill. *NISEI: The Quiet Americans*. New York: William Morrow and Company, 1969.
- Ichioka, Yuji. *The Issei : The World of The First Generation Japanese Immigrants 1885-1924*, New York: Free Press, 1990.
- 飯野正子「日系アメリカ人」『事典—現代のアメリカ』東京:大修館書店、2004.
- Kurashige, Scott. *The Shifting Grounds of Race*. New Jersey: Princeton University Press, 2008.
- Lowe, Lisa. *Immigrant Acts*. Durham: Duke University Press, 1996.
- ナイワート、デヴィッド(著)ラッセル 秀子(訳)『ストロベリー・デイズ - 日系アメリカ人強制収容の記憶』東京: みすず書房、2005.
- Robinson, Greg. *After Camp*. Berkley, CA: University of California Press. 2012.
- ローゼンバーグ、エミリー、S. (著) 飯倉章(訳)『アメリカは忘れない—記憶の中のパールハーバー』、東京: 法政大学出版局、2007.
- サイード、エドワード、W.(著)今沢紀子(訳)『オリエンタリズム』(上・下) 東京:平凡社、1993.
- Sato, Dale A. *Japanese Americans of the South Bay*. South Carolina: Arcadia Publishing, 2009.
- スターケン、マリタ(著)岩崎稔他(訳)『アメリカという記憶』東京: 未来社、1996.
- Takaki, Ronald. Strangers from a Different Shore. Boston: Little, Brown and Company, 1998.*
- 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ:強制収容と保障運動による変遷』東京: 東京大学出版会、1994.
- Toomey, Stella-Ting. "Intercultural Conflict Competence as a Facet of Intercultural Competence Development" in *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*. CA: SAGE Publications, 2009.
- 植木照代「中国系アメリカ人の歴史」アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学—記憶と創造』、大阪:大阪教育図書、2001.
- Yamamoto, Hisaye. "Introduction," in Mori, *The Chauvinist and Other Stories*, Los Angeles, CA: University of California, 1981.
- . *Seventeen Syllables and Other Stories*. New Jersey: Rutgers University Press, 2006.
- . King-Kok Cheung ed. "*Seventeen Syllables*." New Jersey: Rutgers University Press, 1994.